

工事の 現場より

亭榭保存修理事業

今はこんな様子だよ。



8月1週目

亭榭保存修理事業の大本命である屋根葺き作業に取り掛かるため、材料が搬入されました。メインの檜皮=檜の樹皮の他、軒裏の板など、それぞれ屋根を葺くのに適した形に加工されて用意されました。屋根葺き作業といえば現場で屋根を作る作業が花形ですが、その作業に至るまでには現場外で材料の採取・加工作業を経ています。すべてが丁寧な手作業で、屋根葺き作業全工程に対しその割合は7~8割を占めると言われる、重要な工程です。



◀搬入された材料の検査を行いました。必要な形・数量が揃っているか、品質が適切かなどを確認します。亭榭は屋根の規模は小さいですが形が独特の為、特に檜皮の種類が豊富で、細かくチェックを行いました。

(左) 檜皮の確認作業

(右) 軒裏板の確認作業

職人 file 05 【原皮師】



檜皮=檜の樹皮は、立ち木のままの檜の木から剥がして得られます。生きている木から木の成長細胞を傷つけずに剥がしとる技により、木を傷めることなく採集することができ、十数年後にはまた樹皮が再生するため何度も採集することができます。森林資源に恵まれ、また樹木と上手に付き合い続けてきたことによる、日本が誇る知恵・伝統的な匠の技の一つです。檜の樹皮を採集する職人は「原皮師」と呼ばれます。檜の木を傷つけず、また高い位置の樹皮まで要領よく剥がしていくのに、原皮師は縄だけを使って登っていきます。命綱は却って邪魔と言わんばかりに、身軽に10数メートルまで上って採集作業を行っています。



◀ 檜皮採集の作業の様子。原皮師はすっとまっすぐ立ち並ぶ
▲ 檜の森に分け入り、もくもくと樹皮を剥がし集め、束ねてまとめて出荷します。森と共に生きてきた日本人の知恵と生き様が、伝統建築を支えているのです。

こうじ 工事の げんば 現場より

亭榭保存修理事業

今はこんな様子だよ。



8月 1週目



森で採集された檜の樹皮は、そのままでは大きさも厚さもバラバラで屋根葺き作業には使えないため、屋根を葺くのに適した形や厚みになるように丁寧な下ごしらえ作業を行います。この地道な作業が、現場の屋根葺き作業を支えているのです。

職人 file 06 【檜皮の拵え】



荒々しい自然のままの皮（＝生皮）が、職人の操る「庖丁」によってきれいに整えられ檜皮となり、出荷待ちの形で積み重ねられていきます。屋根の大きさ・サイズにより必要とされる檜皮の形や量は様々、要望に応じて適切な量の拵えを行います。全国各地の文化財の現場は、このような縁の下の力持ちに支えられているのです。室内作業なので現場のような暑さや寒さ・天候に振り回される負担はないものの、座ったまま続ける仕事で、地道な作業のため若い後継者が育ちにくいというのが悩みどころだそう。



丸太をまず「みかん割り（六等分）」し、そこから厚板を切り出します。その厚板を手で割り裂いて二等分することを繰り返し、最終的に一分（＝約3mm）の薄い板＝柿板を作り出します。手割りのため板の表面は凸凹がありザラザラ、そのため屋根板として並べたときに板同士が密着しないという特性があります。

職人 file 07 【柿板製作】



屋根葺きに使われる木を割り裂きながら作られる板は、木の繊維を断ち切らずに作られているため傷みにくく、また凹凸があることで重ねても密着せず、毛細管現象による水の吸い上げを起こしません。丁寧に手作業で作られる板はかつては一番手軽に使えた屋根材、今では逆に高級品です。

今回の裏板は厚板なので厳密には「柿板」ではありませんが※、製法は同じ。形と厚さを整えるだけでなく、唐破風のカーブに合わせた曲線を作り出せるよう、材料の特性を考えて製作されました。

※手で割り裂いて作る板のうち、3～5mmの厚さの物を「柿板」、それ以上の厚さの物を「柘板」、「木賊板」と区別します。裏板は檜皮の軒付を支える化粧板で、それ以上の厚みがあります。